

早稲田社会学会ニュース 第52号

2018年11月6日発行

早稲田社会学会事務局

〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1

早稲田大学文学部 社会学研究室内

Tel: 03-5286-3742

E-mail: socio-office@list.waseda.jp

URL : <http://www.waseda.jp/assoc-wss/>

今回のニュースの内容

1. 第70回早稲田社会学会大会の報告
2. 2018年度早稲田社会学会総会の報告
3. 2018年度研究例会の報告
4. 2017年度研究助成の報告
5. 2018年度研究助成について
6. 入退会者のお知らせ
7. 学会費納入のお願い

1. 第70回早稲田社会学会大会の報告

第70回早稲田社会学会大会は、2018年7月14日（土）に早稲田大学戸山キャンパス33号館第1会議室において開催されました。報告者および報告題目、司会者、討論者は次のとおりです。

一般報告

司会者： 牧野 智和（大妻女子大学）
報告者： 大貫 恵佳（駒沢女子大学）
「権力の空白」と民主主義——G. アガンベンの主権理論から考える
河野 昌広（関東学院大学）
四国遍路記のナラティブ研究

シンポジウム 社会学研究と社会学教育

報告者： 江原由美子（横浜国立大学）
「社会学分野の参照基準」とは何か？ ——「大学教育の質保証」の動向との関連で
大久保孝治（早稲田大学）
大学生が社会学と出会うとき
藤田結子（明治大学）
「周縁」の周縁で教える——米英日の比較、および他学部での社会学教育について
討論者： 岡本智周（早稲田大学）・鈴木洋仁（事業構想大学院大学）
司会者： 石倉義博（早稲田大学）

シンポジウム報告

第70回となる本年度の学会大会では、江原由美子氏、大久保孝治氏、藤田結子氏をお招きして、「社会学研究と社会学教育」をテーマにシンポジウムを開催した。これは、社会学を研究することの意義と、社会学を教えることの意義という観点から、社会学が現在置かれている状況を捉えなおすことを目的としたものである。

第一登壇者の江原由美子氏の報告『社会学分野の参照基準』とは何か：『大学教育の質保証』の動向との関連では、日本学術会議社会学委員会「社会学分野の参照基準検討分科会」が、2014年に発表した「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 社会学分野」の作成に日本社会学会社会学教育委員会として携わった立場から、参照基準作成の文脈と目的、今後要請される教育プログラム単位での自己点検・自己評価における参照基準の「使い方」が示された。

第二登壇者の大久保孝治氏の報告「大学生が社会学と出会うとき」では、戸田貞三の開講の辞、清水幾太郎の述懐をもとに、社会と闘い、社会問題を解決する道具として社会学をとらえ、場合によってはそれを用いて自らの立身をはかろうとする戦前・戦後の大学生像と、社会学を、オルタナティブな視点（社会学的想像力や脱常識）を提示し、自己を取りまく抑圧的な社会からの解放やセラピー、そのなかでの生存戦略を与えてくれるものにとらえる現代の大学生という、「社会学」と「社会」と「私」の位置づけの変化が示され、必ずしも社会学研究者を目指すわけではない現在の大学生にとっては、「私」の個人的問題を前面に押し出した研究（卒業論文）があってもよいのではという問題提起がなされた。

第三登壇者の藤田結子氏の報告『周縁』の周縁で教える：米英日の比較、及び他学部での社会学教育についてでは、「周縁」をキーワードに、米国と英国で大学院教育を受けた経験と観察から、周縁者である留学生の研究テーマ設定、またカリキュラムの標準化の程度や博士学位取得までの期間など、両国の社会学教育が対比的に示され、あわせて、海外学位取得者の日本国内での研究者キャリアの周縁性、非社会学系学部・学科で教えるという社会学教育における周縁の状況について論じられた。

これら三つの報告に対しては、討論者の岡本智周氏、鈴木洋仁氏から、各報告の接点を示すことでそれぞれ

の論点を深め、同時に議論の包括をはかる問いがなされ、シンポジスト間、またフロアを交えての活発な討論が展開された。

(早稲田大学 石倉義博)

2. 2018 年度早稲田社会学会総会の報告

2018 年 7 月 14 日 (土) 17:15~18:00 まで早稲田大学戸山キャンパス 33 号館第 1 会議室において、2018 年度早稲田社会学会総会が開催されました。

1. 議長選出

嶋崎尚子氏が選出されました。

2. 議事

2-1 報告事項

- 1) 理事会活動報告 (竹中庶務担当理事)
- 2) 研究活動委員会活動報告 (石倉研究活動担当理事)
- 3) 編集委員会活動報告 (関水編集担当理事)
- 4) 2018 年度研究助成の申請と採択について (竹中庶務担当理事)

2-2 審議事項

- 1) 2017 年度決算案の件 (菅原会計担当理事)
※同封の決算報告をご参照ください。
- 2) 会計監査報告 (竹中庶務担当理事)
- 3) 2018 年度予算の件 (菅原会計担当理事)
※同封の決算報告をご参照ください。

3. 2018 年度研究例会の報告

第 40 回早稲田社会学会研究例会は、今回はじめての企画として、三田社会学会との合同研究例会という形式で以下のように開催されました。

日時：2018 年 5 月 19 日 (土) 14:00~17:00

会場：早稲田大学文学部 (戸山キャンパス) 39 号館 6 階第 7 会議室

司会者：熊本博之 (明星大学)・岡原正幸 (慶應義塾大学)

報告者・討論者および題目：

第 1 報告：高橋かおり (立教大学・早稲田社会学会)

「文化政策から見たプロフェッショナルとアマチュアの境界——芸術家の定義をめぐって」

討論者：森山至貴 (早稲田大学)

第 2 報告：後藤一樹 (慶應義塾大学・三田社会学会)

「〈漂泊〉と〈定住〉の交響史——四国遍路のクロス・ナラティブ研究」

討論者：有末賢 (亜細亜大学)

研究例会報告

本年度の研究例会は、先に記したとおり、三田社会学会との合同企画として開催された。その目的は、両

学会の交流を深めることを通して社会学研究のさらなる向上を図ることにある。そこで、まずは両学会の若手研究者による研究発表会を行うべく、三田社会学会の岡原正幸先生と相談しながら人選を進めた結果、高橋かおり氏、後藤一樹氏という気鋭の研究者に報告をお願いすることとなった。また、両報告者の希望に基づき、森山至貴先生、有末賢先生に討論者を務めていただき、50名を越える参加者も含めた、濃密な議論が展開された。

第1報告の高橋氏は、2010年代の日本の文化政策における「芸術家」の定義を整理した上で、①日本ではプロフェッショナルの芸術家ではない人たちに対して積極的に支援がなされていること、②芸術家かどうかの定義はそれぞれの目的に応じて設定されており絶対的な基準は存在しないことを明らかにした上で、プロの芸術家ではないが芸術に関わっている人々のグラデーションを豊かにすることは、トッププロの芸術家たちのさらなる活躍のためにも必要であることを指摘した。第2報告の後藤氏は、四国遍路を歩く「お遍路さん」どうしの交流、遍路宿や「お接待」を通してお遍路さんに関わる地元の住民との交流など、さまざまな人たちのナラティブが重なり合い、響き合うことで紡ぎ出される四国遍路の世界を、博士学位請求論文の正式な資料として提出された、後藤氏本人による遍路旅のドキュメンタリー映像作品を軸に描き出した。

今回の研究例会で、共に長い歴史をもつ両学会の新たな交流の一步が踏み出された。来年度の合同研究例会は、三田社会学会の主催で開催することが検討されている。今年度同様の有意義な研究例会となるよう、研究活動委員一同、尽力する所存である。

(明星大学 熊本博之)

4. 2017年度研究助成の報告

昨年度の研究助成の対象は、次の1件の研究でした。

- 1) 研究題目： 中国残留孤児二世のエスニック・アイデンティティに関する研究
——生活史にみる世代間継承と変容
研究代表者： 張龍龍 氏（早稲田大学大学院文学研究科）
助成額： 15万円

研究成果の概要について以下の報告書が提出されました。

- 1) 「中国残留孤児二世のエスニック・アイデンティティに関する研究——生活史にみる世代間継承と変容」
張龍龍（早稲田大学大学院文学研究科）

本研究では、残留孤児第二世代の来日と定着過程を解明する。分析にあたっては、残留孤児51名、第二世代89名、第二世代配偶者1名、元中学校教員2名、高校教員1名、身元引受人1名、元自立指導員2名を対象とした質問紙調査と半構造化インタビュー調査を用いた。とくに、残留孤児以外の方々へのインタビュー調査は、主に本研究助成によって実施された。

筆者は、残留孤児第二世代を、①1980年代半ばまでに連れられて来た「子どもたち」、②1980年代後半以降に急かされて来た「青年たち」、③1990年代末まで呼び寄せられた「成年たち」、④1990年代末以降に来日を望んだ「中壮年たち」という4つのタイプに分けた。1980年代半ばまでに、学齢期にあたる「子どもたち」は、日本に連れられて来てまもなく編入学したが、定着援護体制がまったく整っておらず、家庭や学校で多様な問題に苦しめられていた。1980年代後半、「青年たち」は「20歳以上の者を私費に」という年齢制限に急かされ、目的が不明確であるままに来日し、就業より結婚を優先した。1990年代に、私費で呼び寄せられた「成年たち」は、長引く不況のなかで生活基盤を構築した一方、長年のストレスによって、夫婦関係に亀裂が生じた。彼らと比較して、「中壮年たち」の多くは生活保護に依存している。筆者は、4つのタイプを比較しながら、残留孤児第二世代の来日と定着研究を進めている。

5. 2018年度研究助成について

2018年度の研究助成の募集に対して、今年度の申請はありませんでした。

6. 入退会者のお知らせ

理事会において以下1名の入会が承認されました。(以下、敬称略)

2018年5月19日理事会 永山 聡子 (一橋大学大学院社会学研究科・大学院生)

理事会において以下の3名の退会が承認されました。(以下、敬称略)

2018年5月19日理事会 日高 洋子
2018年5月19日理事会 高瀬 雅弘
2018年5月19日理事会 藤井 達也

7. 学会費納入のお願い

本年度の学会費が未納の方は、早急にお振り込みくださいますようお願い申し上げます。なお、本状と入れ違いになりました節はご容赦ください。

口座番号：00100-3-38020 (郵便振替)
加入者名：早稲田社会学会
(年会費：一般会員 5,000円 学生会員 3,000円)

複数年度分の会費を納入される場合、および転居・異動などがあった場合には、通信欄にその旨を明記ください。なお、年会費の納入記録についてのお問い合わせなどがありましたら、事務局 (socio-office@list.waseda.jp) までご連絡ください。

■学会費の納入にご理解とご協力をお願いいたします！

近年、学会費納入率が低下しており、学会運営に支障をきたしております。会員の皆様には、引き続き、早稲田社会学会活動にご理解いただき、会費を納入いただけますようお願いいたします。

以上